

[V + N] 構造の二字漢語名詞について

——動詞語基による装定の問題を中心に、言語交渉の視点から——

沈 国 威

キーワード：漢字語・名詞・装定・借用語・[V+N] 構造

要 旨

二字漢語の場合、動詞的要素による装定の構造：[V + N] は、日本語では統語的造語型であるのに対して、中国語では非統語的造語型である。この造語型をめぐって、両言語において顕著な相違が存在し、近代以降の中日語彙交渉の一断片が伺える。本稿は両言語におけるこの造語型の造語性と、言語交渉によって生じた二、三の事実について考察する。

0. はじめに

「殺人」「排水」「閱兵」「訳書」のような動詞語基と名詞語基（以下動字、名字と呼ぶ）が [V + N] の形で構成された語は、中国語の造語法に従って、作られたものと認識されている。しかし一方、近代語研究によって、中国語の [V + N] 構造は近代までに、造語型として、生産性が弱く、その活発化は、外国語の刺激によったものである事実が明らかになった。なかんずく、近代以降中国語と密接な交渉関係を保ってきた日本語の役割が特に我々の関心を引く。

中国語では、V + N という順序で配列された単位において、[V] に対して [N] は、動作の行為者、対象、動作遂行と関連のある道具や場所などさまざまな意味的相違がありながら、同じ統語的位置：目的語格にある。従って、統語的に単位全体は自動詞句相当の機能を保持しなければならない。しかし、実際には、[V + N] 構造をなす語は、統語上常にこのように求心的に振る舞うとは限らず、次のように他動詞句、形容詞、副用語、名詞として機能するものも少なくない：

- ・他動詞：動員、出版、任命…cf. 動員軍隊；出版図書；任命職務
- ・形容詞：失望、抽象、消極…cf. 非常失望；更（もっと）抽象；很（とても）消極
- ・副用語：到底、費心、
- ・名 詞：対象、動機、動脈、読物、領土、採光、定義、投影、投資、賽車、操場…
（下線付きの語は『漢語外来詞詞典』において、日本借用語としてリストアップされているものである。以下同）

この中に、動字と名字が修飾の関係（即ち連体修飾関係）で名詞を形成するパターンは、

(2) [V+N] 構造の二字漢語名詞について

「閲兵」「出版」のような動詞と違って、後に述べるように、中国語において、非統語的造語型であり、従って、その運用は、種々の制約が課せられて、生産性は、日本語(和語系、漢語系)と比べた場合、一段と低い。しかし、この事実は日本の漢字語研究において、問題にされていないようである。

本稿は、「動脈」「定義」のような動字による装定関係を有する [V + N] 構造とその造語性について、日中言語交渉の視点から、考えてみたいと思う。

1. 造語型としての動字による装定構造：[V + N]

1-1 中国語において

従来の研究では、中国語の動詞は「裸」のままでは、連体修飾機能を持ち合わせず、従って、[V + N] (下線付きの N は、ヘッドを示す) は統語上の構造であり得ないとされる。実際に存在している [V + N] 構造の語に関しては、あくまでも、非統語的造語型の現象として、しかも歴史文法の導入によって、説明されている(文献3参照)。しかし、角度をかえれば、この事実は、次のように解釈することができると思われる。

[S + V + O] を典型的な語順とする中国語では、動詞による支配：[V + O] と、動詞による装定：[V + N] の二つの意味的に異なる統語関係が、同一の構造型：[V + N] を採っているので、構造解釈の二義性を解消するために、下位にある統語関係：[V + N] は常に回避されなければならない。換言すれば、[V + N] 構造において、述語・目的語という統語的読みが優先されることになっているのである。このような解釈は、暗黙裏に、中国語の動詞はそのままでは連体機能を備えないと規定する以前に、統語的衝突(同構造異義)を引き起こさなければ、動字による装定の実現は一向差し支えないと主張することになる。例えば、[V + N] 構造において、次のような意味関係の場合は、動字による支配の読みがブロックされ、装定が可能であると思われる。

- A. 自他動詞の行為者：講師、警官、作者、乗客、随員、使徒、耕牛
- A'. 移動、存在の主体：来客、来信、移民、積雪、遺体、流星、降水
- B. 動作遂行上の場所等：議院、講座、舞台、寝室、禁区、運河、考場
- C. 動作遂行上の道具等：玩具、繃帶、触角、担架、証券、刺刀、渡船
- D. その他：～法、～品、～物、～点、(～手、～師、～者、～員、～家)

一方他動詞、それと支配的共起関係にある名詞群(即ち、対象)の組み合わせは、[V + O] と読まれやすく、構造体は、[V + N] のように動字による装定の形で名詞化することが難しいと予測される。しかし、現代中国語ではこの予測の反例が少なからず存在している。後で詳しく述べるように、動字による装定の可否は複数の要素によって左右されているが、成分間の結合的意味が、如何に動字の有する統語的支配力を克服するかは、決定的な要因である。この視点において、同じ [V + N] 構造の和製漢字語の語形成と比較すれば、種々の興味深い示唆が得られるであろう。

1-2 日本語において

近代以降、日本では西洋文明を吸収するため、数多くの新漢語が作られ、中国語もその恩恵を受けたことは周知の事実である。この近代の造語過程において、[V + N]構造は造語型として、大いに活用された。その際、[右側ヘッド]の日本語では、[V + N]の構造体は、目的語抱き込みの動詞([V + O] ⇒ V)より、装定的関係の名詞を形成していくのが自然のはずである。しかし限られた範囲での調査だが、前者の方がはるかに多い。即ち、統語的造語型([V + N] ⇒ N)から非統語的造語型[V + N] ⇒ Vへと固有の造語パターン^{注3}を変えることは、造語型の生産性にとってマイナスの要因になっていないようである。ところで、近代日本での漢字による造語における二つの造語パターン：外来型([V + N] ⇒ V)と従来型([V + N] ⇒ N)はどのような相互関係にあるのか。論理的には次の二つの可能性が考えられるであろう。

- i. 中国語の統語的制約が、日本語において作用するはずがなく、意味的に装定的修飾関係の可能な文字列なら、成語できる。
- ii. 語のレベルではあるが、構造をいじったことに加えて、記号としての漢字を使って、新語を構築する以上、中国語の制約とはいえ、少なくとも記号体系のものとして、何らかの形で作用し、語形成に影響を与える。

日本語における[V + N] ⇒ N造語型の造語事実を見る前に、まず中国語における動詞による装定の一般原則を確認しておくことにしよう。

2. 動字による装定の条件：概念化と情報量、そして両言語の相違

概念化：統語上の構造衝突を避けるのが、装定実現の主要条件であることを述べた。衝突の恐れがある場合に、装定成分となる動字は動詞としての統語的支配力を捨て、動作の抽象的概念だけを保持するという概念化の過程を経なければならない。このような概念化は言語によって、様々な形で実現されている。例えば、中国語の[V + N]では、VとNのどちらかが拘束語基であるときに、統語レベルの構造体であり得ない(一部文法形態素の挿入が厳しく制限される)。つまり、拘束語基を含む[V + N]では、動字の統語的支配力は失われてしまう。従って、自由語基と自由語基(FF)の結合に比べて、拘束語基を含む形式(BB、或はFB、BF)が、成語しやすい。一方、日本語において動詞が居体言の形を採って、概念化し、造語成分となる。

情報量：中国語においてFFで、しかもV + Oの意味関係をもつ装定的名詞がある。このような語に関して読みの二義性が予測される。代表的なものに「炒飯」「焼魚」「烤鴨」のような[炒、煎、蒸]などの料理動詞によって構成された語がある。料理動詞を含む構造体は、装定：[V + N]と、支配：[V + O]の両方の読み、例えば「炒飯」は、「炒めたご飯」という意味を持つ語と、「ご飯を炒める」という意味を持つ連語の両方の解釈が可能である。中国語の統語規則から見れば、後者は当然だが、前者は何故可能であろうか。これまでの研究では説明を与えようとする努力が見られないようである。^{注4}

装定とは、総体から個別への弁別的情報の添加作業と言える。情報量の観点から見れば、中国語の料理動詞と他の類の動詞との相違点は、動作遂行の様式(マナー)が義務的意義

(4) [V+N] 構造の二字漢語名詞について

素として、当の動詞に編入されている点にあるとも言えるかもしれない。例えば、[炒、煎、蒸、烤] について次のように記述することができるであろう。

- 炒：[強火、油適量、水を加えない、蓋をしなない、かき混ぜる…]
煎：[弱火、油少量、水を加えない、蓋をする、かき混ぜない…]
蒸：[水蒸気を利用して、食物を作る、或は、加熱する…]
烤：[直接(木炭か木などの)火で食べ物をあぶる…]

しかし、動詞のマナー性をどのように規定すればよいか(歩く vs 走る cf. 競歩)という意味論上の難題があるのに加えて、典型的なマナー動詞でも、すべて料理動詞のような統語的特徴を持っているとは限らない。例えば、<紐、縄或は帯などで縛りくくる>という意味を持つ動詞、縛(=縛る)であるが、「縛」で構成された名詞は、綁匪(誘拐の強盗)、綁腿(ゲートル)の二つだけで、どちらも装定の形で構成された名詞ではない。つまり「マナー性」だけでは、料理動詞と他の動詞とを区別できず、装定可能の理由も説明できない。結論を先に言うと、料理動詞は、生産(加工)動詞[動詞と対象が生産(加工)活動と生産(加工)物との関係にある]と規定できる。実際には両言語において、大きな差が観察されるが、生産動詞の場合は情報量の増加によって装定の成分となることができる。この点では後に述べる働き掛け性の動詞(3-5、3-6)と異なる。例えば中国語の料理動詞は、共通の目的を持ちながら異なる様式で遂行される、一つの閉ざされた類と見なされうる。動作様式の差による対比の意味の存在は情報量の増加につながる。仮に「同類項の排除による限定」と称しておく。このような特徴を有する動詞群は料理動詞と同じ統語的振る舞いをすると予想される(彫花、綉花)。同類項としての動詞群が言語或は文化によって異なることは言うまでもなからう。

3. 両言語における [V + N] 構造の造語性について

前節までの議論から、動字による装定構造：[V + N] の造語性に関して、両言語では大きな差が存在していると予測され得る。以下、具体例に即しながら、検討してみたいと思う。まず、意味的特徴によって、動字を以下の六種類に分け、その代表的な字例について、述語動詞と対象名詞との関係という角度から、それぞれの成語の状況を見ることにする(以下では、上つき^cは中国語のみ、下つき^jは日本語のみ存在する語を意味する)。

3-1 存現(存在、出現、消失)を表す動字と存現の主体である名字

中国語では、存現の主体が不特定(未確認)の時に、主語と述語動詞の順序が[S-V] → [V-S]のように、普通の動詞句と逆の語順を取る(いわゆる存現文語順)。「来」、「去」、「飛」などが移動による出現、消失の意味を表す典型的な動字であろう。例えば、「来」「飛」を含む二字語に次のものがある。

- 来- : 年、月、週、日^c、信、書、訊^c、意、賓、人^c、潮、路^c、源
飛- : 弾、花^c、蝗、機^c、禽、艇^c、眼^c、魚、賊^c

「堆肥」「積雪」「降雨」なども有名な例である。存現構文の場合、名字は動詞の働き掛け

を受けるものではなく、動作の意味を完結させる主体である。このような主体は、動詞の有するマナー的情報によって修飾されることができる。例えば、「行く」「来る」の移動方向性、「走る」「飛ぶ」の移動方式がそれである。従って、この類の動詞の場合は装定的な関係が成立しやすく、造語型としても生産的であろうと思われる。「来月」「来週」のような日本語のみにあって、中国語にない語も存在しているが、これは偶然の空白と考えてよかろう。指摘しておかなければならないのは、同じく移動動詞で語を形成していくが、日本語が[右側ヘッド]の原則であるのに対して、中国語は主語・述語の倒置という統語規則が運用され、語形成のメカニズムが異なるはずだろうということである。なお、方向格の名詞成分(日本語の「へ」格)は、移動動詞の装定を受けることが、普通できない。

3-2 感情、心理活動を表す動詞

「愛、恨、仇、…」などがこの類に属しているが、生理的状态を表す動詞もこの類に入れるべきであろう(例えば、餓漢、酔鬼、病人、醒獅^{注5}…)。感情、精神などの心理活動或は状態を表す語は、普通の他動詞と異なり、目的格にある名詞が動作の働き掛けを受ける対象というより、動作発生の誘因(或は、当の状態を帯びている主体)と考えられよう。中国語ではこの類の動詞は統語的にも、性質を表す形容詞に近い。語形成の成分として、当の心理活動、状態を誘発する性質をもつもの(或は、当の状態を帯びている主体)と、装定の関係が成り立つのである。例えば、「愛」を装定成分として、次の語がある。

愛- : 称、情、/人、妻、児、物^c、犬、妾、車、嬢₁…

(斜線の前の名字が、当の動字とは二次的補足成分という関係にあり、従って成語するには問題がないが、比較対照のため、挙げておく。以下同)

但し、「愛国」「愛社」のように目的格に組織名詞が来ると、動詞による支配という読みになってしまう。

この類の動詞では両言語に違いが見られないようである。

3-3 対象を道具として捕える動詞

この種の動詞は目的格にある名詞を支配する形を取っているが、意味的には、道具として扱っているところに特徴があろう。この類の動詞、つまり意味上明示的に目的格にある名詞を道具として扱う動詞は、非常に少ないが、しかし、動作の道具的成分、——厳密に言えば、動作成立にかかわる二次的補足成分(道具、場所、時間、目的など)は、当の動詞によって修飾され得ると一般に言うことができる。従って、この類の動詞は装定の成分になりやすいと思われる。その代表的な語:「用」を装定成分として持つ語に、次のものがある。

用- : 品、途、法、具、/意、心、語、事₁、人^c…

3-4 生産(加工)動詞と生産物

生産(加工)動詞の類では、目的格の名詞は、動詞の働き掛けを受ける対象であると同時に、動詞の表す動作によって作り出された生産物(結果)でもある。即ち動作が完結すると

(6) [V+N] 構造の二字漢語名詞について

ころに対象が存在する。ここに動作と対象のつながりがあって、対象が装定を受ける可能性が潜まっている。とはいえ、この可能性を装定として実現させるには、更に情報量の増大を必要とするようである。中国語では生産(加工)の様式まで編入されている料理動詞が装定部分となり得る理由はここにあると思われる。一方、日本語では「漢字」はあくまで実質概念を表す記号であり、統語的機能(用言の場合)は、活用語尾に託されているが、動字の場合は実質概念の外に付随的情報(例えばテンソ・アスペクト、ヴォイスの情報)も読み込ませることができる。この点では中国語と対照的であり、生産性において大差がうかがえる訳である。例えば、「造」、「製」、「作」を装定成分として持つ二字語に次のものがある。

造 - : 花₁、物

製 - : 品、法、／鋼₁、葉₁

作 - : 品、法、／物、文、例

『岩波国語辞典』(1963年版)によれば、「造花」「造物」「製鋼」「製葉」などの語義解釈は、本物の花に似せて作った、人工の花；造物主が造った^{注7}物；…つくられた鋼鉄；作った薬品とあるが、正にこのような付随的な情報の読み込ませは、動作様式の観点から言えば、無色透明と言える、「造、製、作」のようになかなか抽象的な生産動詞を装定の成分とさせ得るのであろう。

3-5 抽象的な働き掛けを表す動詞

「定」、「制」などがこの類に入る。「定」を装定成分として持つ二字語に次のものがある。

定 - : 庄₁、員、温₁、価、額、款、義、量、評₁、日₁、時、数、理、率₁、律

抽象的な働き掛けを表す動詞は、対象に対してある種の影響作用を与えるのが普通であり、社会的活動を表す語も多い。従って、対象は必ずしも有形の存在物ではない。この類の動詞に関して、語形成上両言語の相違が大きく見られる。中国語においては、この類の動字が装定の形で名字にかかっていくことができないようである。一方、日本語ではこのような制約を受けてはいない。

一方、「読」「看」などは、対象物と言うより、動作主自身に影響を及ぼし返すと言うべく、中国語では、対象物の装定成分になれないようであるのに対して、日本語には「読本」「看板」(混種語に「見本」という語がある。

3-6 対象に物理的外力を加える動詞

「打」、「圧」、「刺」などが代表的なものである。「打」、「圧」を装定成分として持つ二字語に次のものがある。

打 - : 率₁、席₁、順₁、点₁、／球₁、瓜^c(スイカの一種。cf.手^c、者₁)

圧 - : 力、政

対象物に外力を加え、それを変形、移動させる、この類の動詞は働き掛け性が一番強く、しかもこの働き掛け性こそ言表意図の中心である。また、動作と対象の間に生産動詞と生産物の対にみられるような必然的な関係がない。従って、装定的要素となれないのが普通

であるが、テンス・アスペクト、ヴォイス的な情報の仲介によって、装定語を構成することも希にある。但し中国語ではこのような語の成立はかなり特殊なきっかけが必要であろう。

以上をまとめてみれば、

イ) 中国語では、漢字の [V + N] 構成体において、若し [動詞 + 目的語] の意味関係が成り立たなければ(例えば、自他動詞の行為者、道具場所のような二次的補足成分など)、動字の装定によって成語することが可能である。換言すれば、構造衝突の回避は動字装定の主要条件である。この意味において [右側ヘッド] の日本語では、少なくとも動詞の要素による装定を阻む統語構造上の制約がない。

ロ) [動詞 + 目的語] の意味関係が成り立つ [V + N] では、動字の概念化と情報量が装定の可否を左右する。中国語の動字は概念化と情報量の増加において、日本語より厳しく制限されている。例えば中国語料理動詞の装定は、[同類項の排除による限定]という特別な理由によって実現されたのである。

ハ) [V + N] 構造において、動作と対象の意味関係も装定の成立に影響を及ぼしていると思われる。例えば中国語では「存現」の主体として把握できる対象は、装定を受けやすい。一方、3-6のような意味関係では両言語とも装定の関係が成立しにくい。

二) 以上で触れた造語性に関する両言語の種々の相違は、近代以降の漢字造語の過程に反映されているはずであろう。

4. 異言語干渉について

前節までに、[動詞 + 目的語] の意味関係を有する [V + N] 構造は、中国語では装定の名詞として成立しにくいことを述べた。ところで、中国語に「按鈕(押しボタン)」という語がある。「按」は、押スという意味で、「鈕」はボタンという意味である。動作と対象の関係は上の分類によれば、3-6に属し、装定関係の成立しにくい部類である。このような語の発生は恐らく翻訳借用(calque)によるものであろう。つまり、[push button] ⇒ [按 + 鈕] のような造語過程が考えられる。日本語の例を挙げれば、「鮑氷(かき氷)」は翻訳借用によって中国語に入ったものと思われる。このように、直訳的翻訳借用の場合は、「模写」により「変則」の語が生起し易いことは、周知のとおりである。

現代中国語では [V + O] ⇒ N のような装定名詞の新語には、「按鈕」「鮑氷」のような、異言語干渉によってできた語が数多くある。異言語干渉の現象は、このような翻訳借用に止まらず、既成の漢字翻訳語の直接借用も、日中間において可能であり、しかも実際に近代以降大規模に行われた。具体的に言えば、『漢語外来詞詞典』にリストアップされた中国語に入った日本借用語 892 語の中に、次のように [V + N] 構造の語が 123 語あり、そのうち装定の名詞が 84 語ある(その一部は前節まで下線つきで示してある。また下付きの_cは、中国の古典であり、日本で意味の更新が行われたことを意味する)。

印象_c、衛生_c、革命_c、化膿、競技、具体_c、交際_c、採光、催眠、失効、施工、失恋、

(8) [V+N] 構造の二字漢語名詞について

集中、就任、出廷、出版、受難、昇華、審美、製版、宣戦、組閣、想像_c、接吻、挿話、退役、抽象、探険、動員、投機_c、任命、評価、復員、保険_c、予後、落選、理事_c、立憲、臨床

(以下、装定関係が認められる名詞)

学士_c、学府_c、騎士_c、悟性_c、環境_c、現象_c、幹事_c、表象_c、列車_c、入口、覚書、借方、立場、出口、読物、結核、消極、積極、定義、投影、投資、命題、領海、領空、領土、連歌、会社、化学、学会、学歴、歌劇、化石、感性、幹部、議員、議院、議会、企業、記号、協会、訓令、訓話、警官、係数、効果、講座、講師、講壇、作者、作品、作物、錯覚、座棄、死角、使徒、集団、乗客、証券、触媒、随員、成分、成員、戦線、旋盤、訴権、対象、窒素、転炉、動議、動機、動産、動態、動脈、動力、読本、備品、比重、標高、標語、舞台、溶体、溶媒、流体、論壇、

『漢語外来詞詞典』の語源認定と記述には色々な問題があるし、またそこに挙げられたのは日本借用語の全部ではないことも間違いないだろう。そればかりか全体の中でどのくらいの割合を占めるかについてさえ推測できないかもしれない。しかし、上の例語については、次のことが指摘できると思う。

ホ) 学士、学府、騎士、悟性のように、[V+O] 関係を有しない [V+N] 構造は近代以前の中国語においても、装定の形で名詞を形成していくことが出来た。

ヘ) 環境、現象、表象、列車のような、[V+O] 関係を有していて、しかも近代までに自動詞相当句として機能していた [V+N] 構造の語は、装定の名詞に変身しえたのは、日本語の影響によるものと考えられる。

ト) 入口、立場のような和語系の単語は、装定語のグループにのみ存在している。[右側ヘッド] の原則からすれば、むしろ当然の結果であろう。

チ) 上に挙げられた逆輸入の和製新漢語は、結核、投影、投資のような [V+O] 関係を有するものより、動力、流体、乗客のような [V+O] 関係を有しないもののほうが断然^{注9}多い。

ここに、チ) について少し考えてみたいと思う。この事実に関して二つの理由が考えられる。

(1) [V+O] 関係を有する装定名詞が中国語に入りにくかった；

(2) [V+N] 構造の二字漢語において、[V+O] 関係を有する成分による語形成が避けられる傾向にあり、従って、造語型としてそもそも生産性が低い。

(1) は和製漢語を受け入れる時の中国語自身が持つフィルターの問題と考えられる。しかし最終結論を出すには、装定関係の [V+N] 構造の新漢語の全容と、それらの中国語における受容の状況についての、もっと詳細なデータが必要であり、今後の研究が待たれるところである。

(2) はむしろ漢字の造語力一般に関する、より本質的な問題であろう。つまり、[V+N] ⇒ 装定名詞という造語型は、中国語においても、日本語においても種々の制約が課せられているということである。ここに次の事実^{注8}に留意しておくべきであろう。即ち、漢語系の

動字装定名詞は、和語系のそれより遙かに少ないということである。似顔、見せ球、隠し球、送りバント、寝たばこ、飼い犬、飼い主、乗場、降り場、行き先、売り場、などの語からも分かるように、動詞連用形が装定の要素として、活発に造語過程に参入し、動詞と名詞の意味関係も実に多岐多彩である。[動詞連用形 + 名詞] は造語型として強力な生産性を示しており、漢語系と際立った対照をなす。例えば、似顔、見せ球のような補足成分を必須要素とする動字、或は乗場、降り場、売り場、のような方向格或は目的格と取られがちな名字の場合は、漢語系では成語が阻止されている。

1-2の二つの可能性に立ち戻って、おおむね次のことが言えるであろう：[V + N]構造の二字漢語において、在来型の生産性は、外来型の進入によって、ある程度抑制されてはいたものの、中国語の場合と比べて、強力である。近代以降、在来型的な装定語が、翻訳語の借用によって、中国語に流入した。このような語彙の移動は、中国語の造語法にある種の影響を及ぼしていると予想されよう。

言うまでもなく、言語交渉の研究に際して、個別単語の語源認定と比べ、造語パターンないし統語レベルの変動に関しては、より慎重な態度でのぞまなければならない。その意味で、日本借用語の全容がまだつかめていない現段階では、中国語の造語型への日本語の影響を語るのは時期尚早の感があるのも事実である。

5. む す び

中日両言語における漢字語研究の方法論として、我々には次のような演繹的と帰納的の二つの選択があろう。

- a. 両言語の漢字の造語法の相違によって、演繹的に近世、近代の新漢語の身元を確定し、よって、それ以来の両言語における漢字語造語の全過程を把握する。
- b. 身元確定済みのデータから両言語の漢字造語法の相違を帰納し、それぞれの造語特徴に接近する。

もし造語法上の明示的な相違が分かれば、演繹的には和製新漢語か中国の漢語かを選別することが可能となるが、しかし一方、野村雅昭 1988 に：

二字漢語を構成の面から共時的に分析するには、理想的には、1. …〈中略〉 2. 対象となる二字漢語を、中国から流入したものと日本製のものとにわけるという手順が必要だろう。

と、データの身元の確認の先行が主張されているように、二つの方法論は結局、両刀論法的な関係にある。

つまり演繹的な方法で漢字語の身元確認を行うには、まず、両言語の漢字造語法にどんな相違があるかを特定しなければならないが、それぞれの漢字造語法の記述は、身元確認済みのデータから帰納しなければならない。こんな場合、[V + N]の装定構造は、専ら語彙サンプルからではなく、統語側の情報を借りて、両言語の漢字造語法の相違を帰納し得る、数少ない造語型の一つである。^{注10}

言うまでもなく、類推、他の言語からの翻訳借用などの要因によって、造語型の相違を、

(10) [V+N] 構造の二字漢語名詞について

語源判定の絶対的な決め手とすることは危険であるが、新概念の来源、流入時期、経路などの他の文化史的情報を総合的に吟味すれば、成果が期待出来るであろう。或は、控え目に言えば、両言語の造語型の相違に関する研究の結論は少なくとも語源判定の補強的手段として、有用である。例えば、『漢語外来詞詞典』には載っていないが、今まで述べたことを踏まえて、「定律」「制服」「結晶」などは和製新漢語と断定してよいと思われる。

このように、現時点の研究では、二つの方法の併用、つまり通時的語源考察、或は統語的語構成分析によって、確認されたデータから両言語の漢字造語法の異同、特徴を帰納し、その結論をもって、新しいデータの把握に努める、また得られた新しいデータで今までの結論を修正、補強していくという循環が望ましいであろう。

注1 V + O ⇒ N の例は、「知己」「知音」のように古くからあった。これは事件全体を一つの概念として把握し、名詞化した例で、ここでは扱わない。本稿は動字が後ろの名字にかかっていくような装定的関係のある語に限定する。

注2 これらは被装定成分というより、接辞的要素といったほうが正確であろうが、言語交渉の視点から敢えて一類として挙げておく。

注3 野村 '88 によれば、調査された 8,500 語のうち、補足型 (V + O) は 8.6%、約 730 語、修飾型 (V + N) は 6.5%、約 550 語である。
ちなみに中国語の統計を挙げれば、修飾型は被調査語数の 5% くらいを占める (陸志章 1957 と筆者)。

注4 陸志章 1957 は、一つの動詞に対して、その目的格に生起できる名詞は普通、数が限られており、従って語を派生する能力が弱い。料理動詞だけが特別であると述べている。しかし、動字が装定の「軸字」として機能するとき、その造語性に関係するのは、直接目的語の数ではなく、状況的要素の多さである。例えば、「学」は恐らく動字の中で最も造語性のあるものと思われる。

学- : 費、風、府、会、科、歴、名、年、派、期、生、時、士、堂、徒、位、校、業、員、院、者、制…。

注5 中国語では優れる、聳える、曲がる、などの性質一般を表す語は、形容詞であって、動詞ではない。

注6 例えば、「很愛她」「比谁都愛她」のように、程度副詞によって、修飾され、或は比較構文に生起することができる。

注7 『現代漢語詞典』によれば、「造物」は、万物を造り出す神力 とある。

注8 例えば、受難、審美、記号、作者、使徒、比重、接吻、化学などの語が、ロブシャイドの『英華字典』(1866-69)をはじめ、中国の文献に存在している。

注9 この問題について、本稿口頭発表のとき、井手至先生からご質疑を頂き、再考したものである。

注10 両言語において、主な造語パターンとして、

連体修飾型 : N + N ; A + N ; V + N

連用修飾型 : A + V ; V + V

並列対立型 : N + N ; A + A ; V + V

述語目的語型 : V + O (O + V)

などがある。しかし、述語目的語型と連体修飾型のうちの動字修飾型以外は、統語上の特徴を反

映しえず、従って、そこから造語法に関する法則的な相違を抽出することが困難であろうと思われる。例えば、名詞の20%以上は、連体修飾型であるが、しかし、連体修飾構造における成分間の結合が、個別言語の統語規則レベルの問題というより、概念と概念の結び付きに具現される言語習慣と思维傾向に左右される事象であることは、次の例によっても明らかであろう。

[日] ソバカス VS 雀斑 [中]: [日] 汽車、汽船 VS 火車、輪船 [中]

(中日両言語に限って言えば、このような概念の結び方が、能記としての「漢字」の文字列に還元され、そこへ字訓対応の問題も加わると、一層複雑な様相を呈している。しかし、訳語として発生した新漢語の場合は、「直訳」[calque]の影響も忘れてはならない)。

述語目的語型は、両言語の統語的相違が凝縮された造語パターンであり、従来から近代漢語の身元判明に有力な手掛かりとなり得るとされてきた。例えば、人選、体操、体育、徳育などが和製なら、「体罰」も和製である蓋然性が高いと考えてよい。しかしここに少なくとも二つの問題がある。

- 1)、「文選」という語があるように、中国語も [O + V] という型の固有語が全くないとは言いつけないようである。
- 2) この型は非量産的で、語源判定の標識として、その能率が期待できない。

参考文献:

- | | | |
|----------------|--|----------|
| 1. 陸 志章 1957 | 漢語構詞法 | 科学出版社 |
| 2. 趙 元任 1968 | 漢語口語語法 (A Grammar of Spoken Chinese: 呂叔湘訳) | 商務印書館 |
| 3. 陸 俊明 1988 | 名詞性“来信”是詞還是詞組 | 中国語文 206 |
| 4. 北京師範学院 1959 | 五四以来漢語書面語言的変遷和発展 | 商務印書館 |
| 5. 野村雅昭 1988 | 二字漢語の構造 日本語学 VOL. 7 | 明治書院 |
| 6. 荒川清秀 1988 | 複合漢語の構造 日本語学 VOL. 7 | 明治書院 |
| 7. 竝木崇康 1985 | 語形成 新英文法選書第2巻 | 大修館書店 |
| 8. 影山太郎 1980 | 日英比較語彙の構造 | 松柏社 |
| 9. 劉正燾等 1984 | 漢語外来詞詞典 | 上海辞書出版社 |

[付記]

本稿は平成元年度秋期国語学会大会(茨城大学)に於ける口頭発表を修正し、加筆したものである。発表の際、宮島達夫、井手至、田中章夫の諸先生から、貴重なご教示を賜り、また、佐治圭三先生より終始温かいご指導を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

——大阪大学大学院生——

(平成元年 11月 29日 受理)

(平成2年 1月 26日 改稿受理)